

編集後記

雑誌名	日本文学誌要
巻	63
ページ	129-129
発行年	2001-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020165

編集後記

☆ 全国の大学、短大で、国文科、日本文学科の危機が叫ばれて久しい。新世紀を迎えて、世の中には情報化、構造改革の声がいっそう高まり、教育改革論議も喧しい。インターネットでは、署名、匿名を含めて様々な情報が駆けめぐり、日々更新されて画面上を流れ去る。そんな時代に、孤独に書物と向かい合う文学研究などは、世間の片隅に追いやられ、お荷物扱いされかねない。いや現にそうなりつつある。

☆ 昨年、文学部の学生アンケートをまとめていて、授業や講座に対する要望の欄を見ていたら、「もっとベンチャー関係の講座を増やしてほしい」という意見があった。何かの冗談だろうと思ったが、笑えないものがあつた。

☆ 何のために文学を学び研究するのか。世のため、人のためでないことは分かり切っている。かといって、学問のため、私自身のため、というのもどこかそらぞ

らしい。学問とは何か、私とは何かが自明ではないのだから。

☆ 結局のところ、学問とは何か、私とは何か、ということを真摯に問い続けていくしかないのだと思う。勿論、その営みは、学問や私を他者に向けて開いていく道を閉ざした瞬間にすぐに頓挫する。

☆ 昨年亡くなった小田切秀雄先生を悼んで、ささやかな特集を組んだ。多くの卒業生から心に残る文章を頂いた。法政大学日本文学科の歴史の一断面が、文面や行間から、期せずして浮かび上がってくる。学問とは何か、私とは何かを問い続けて来た人々の足跡が、机上の空論ではなく、生きた肉声を通して滲みでている。同時に、これからの日本文学科はどうあるべきか、ということも真剣に考えなければならぬ、そういう思いを新たにした。

☆ この春卒業する皆さんと、そういう話をする機会があれば、と心から思う。

(坂本勝)

<p>二〇〇一年三月二十四日 発行</p>	<p>日本文学誌要 六三号</p>	<p>編集部 坂本 勝 萩原 一雄 大越 嘉七 田中 单之 発行人 杉本 圭三郎</p>	<p>東京都千代田区富士見二ノ 十七ノ一法政大学八十年館 発行所 法政大学国文学会 口座番号〇〇一六〇七六九四三</p>	<p>印刷所 ニチデン 電話〇四二三(九五)三七〇一</p>
-----------------------	-------------------	--	--	------------------------------------